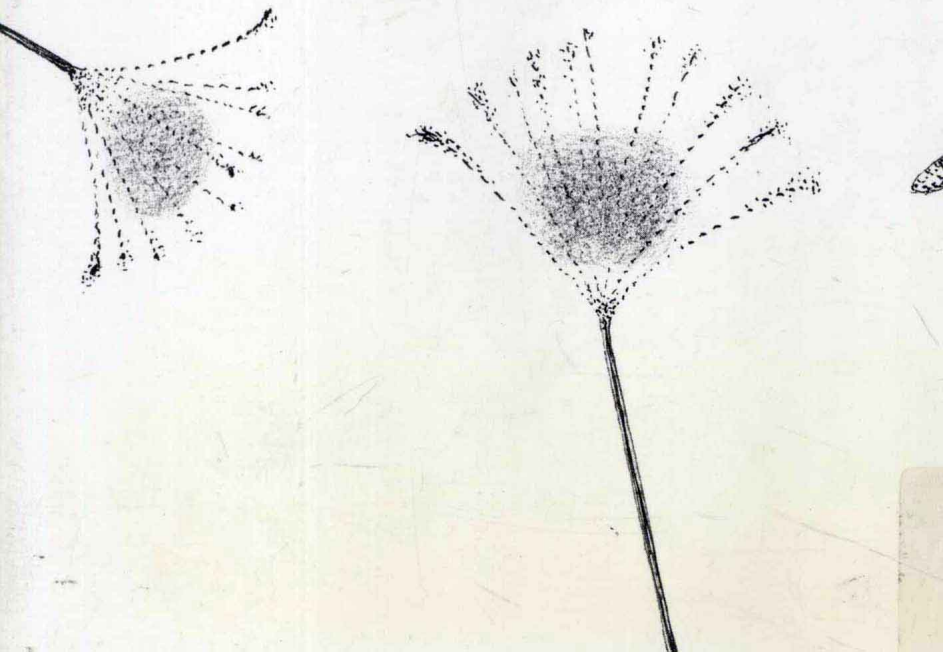




郷 静子 画 森 秀男

わたしの横浜



私の横浜

1982年2月26日第1刷発行

定価1000円

著者◎ 郷 静子

発行者 平 智享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

発行所 株式会社 大月書店 印刷 三晃印刷
製本 中條製本

電話 (営業)813-4651 (編集)814-2931 / 振替東京3-16387

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください

わたしの横浜

郷 静 子 画 森 秀男



大月フォーラムブックス 10

大月書店

街へのあいさつ

私にとって、「横浜」とは何だろう——。祖父父母の代から住んでいて、今もなお暮している街である。関東大震災のときも、横浜大空襲のときもはなれることなく住みつづけた。小学校も女学校も横浜で了えた。結婚後しばらく、東京の三鷹市に住んだことはあるが、それ以外に横浜をはなれたことはない。しかし、だからといって、私にとって「横浜」は決して「大好きな故郷」といった情緒的なものではない。

自分自身を客観的に語ることは難しいが、私は、ものごとに執着しない性格であると思う。人にも物にも場所にも、肩書や身分にも、徹底して執着がない。現実にはさまざまなしがらみに拘束されているけれども、それはなりゆきでそうだっただけのことで、私自身の執着の結果ではない。私の心は自由で、別のいい方をすれば薄情な人間ということになるかもしれない。

私には、もともと「郷土愛」について語る資格などはない。それよりも、見知らぬ土地への放浪のあこがれについて語る方がずっとふさわしい。小説を書くとき、私はしばしば、現実の自分から離れている別の自分に気づく。私を拘束するしがらみから脱け出して、別の存在になる。これは精神世界での変身であり、私の中の放浪志向をかなり満足させてくれる。だからこそ、さまざまな労苦をと

ないながらも、結局、小説をかくのは楽しいことであるのだろう。

ではなぜ、私は、小説ではないルポルタージュを、あこがれの放浪の地ではない現実の「横浜」を書こうとしているのか――。

「愛郷精神」には無縁でも、生活の場である横浜には、私も関心を持っている。家族の衣食住に責任を負っている主婦のひとりとしては、生活の基盤であるわが町に、無関心でいるわけにはいかない。多くの人びとと同じように、私にとっても、自分の生活、家族の生活は大事である。私たちの人生がただ一度きりのものであるのと同じように、一見単調なくり返しのようでありながら、私たちの一日一日は、本当はただ一度きりのものである。さり気なく過ぎていく日々が、いつかは生きていてよかったと思う本当に幸せな一生につながるものであるように、と願わずにはいられない。

若い頃、戦争と病気という大変な時代、生命がけのたたかいの時代をくぐりぬけてきたおかげで、人間にとって大切なものは、生命と平和であるということが身にしみてわかった。それが失われたときには、人間の幸せはないのである。

戦後三五年が過ぎて、私たち横浜市民の生活もずいぶん昔とは違ってきた。大空襲で瓦礫の町と化した横浜や、目ばしいところはすべて占領軍にとり上げられていた戦後の横浜を思うとゆめのようなはなやかさである。しかし、私は、外見的な繁栄や生活の便利だけをCMフィルムのように特別に誇示して、すばらしいことのように考えたりは出来ない。それが人間の生活とどうかかわるのか、市民

の暮しにどれだけ本当の幸せをもたらすのか、そこが市民にとっては一番大切なところではないだろうか。

もっとも、私がするようにマジメに考えるようになったのはかなり最近のことなのだ、ということをお白状しなければならない。定着志向のない私は、地域の生活者としては長い間、怠惰なニヒリストであった。人間を粗末にする思想にはつよいアレルギーを抱きながらも、そのためにたたかう気はなかった。多くの他人とかかわる煩しさがイヤで、個人の努力だけで解決しない問題には、ひたすら無関心で順応してきたと思う。

四年前（一九七八年）の横浜市長選挙で「市民の市長をつくる会」の運動に参加したことが、私を変えてしまった。「市民の市長をつくる会」とおして多くの人びとと知りあい、さまざまな運動にかかわったおかげで、「市民自治」や「市民の連帯」に否応なしに目覚めることになったのである。

そして、問題意識をもってあらためて考えたとき、私は、思いがけないことに気づいた。それは私自身が「横浜」について、ほとんど何も知らないということであった。

観光案内にのっている程度の市内の名所旧蹟を知っているからといって、人口二八〇万のマンモス都市「横浜」を知っていることにはならない。「横浜」の現実を知らずに、市民が安心して暮らせる街であってほしいと願ったところで、おそらく何の意味もないだろう。そう気づいたとき、私はひとりの市民として、自分の足と眼で可能な限り「横浜」をたしかめてみようと思った。

わたしの横浜 目次

街へのあいさつ 三

ふるさと・西区高島町 二

暮しの中の図書館 二七

ボランティアをする主婦 三三

保育所を求めて 四〇

ミナト横浜観光コース 五五

川の思い出——運河の行方—— 六三

街の香り 八

鶴見の朝 七

横浜周辺を歩く 九

キレイな空気がほしい 二七

山ゆりの会 三四

「市民の市長をつくる会」 二五

縁の下の力持ち 二五

草の根の選挙 二六

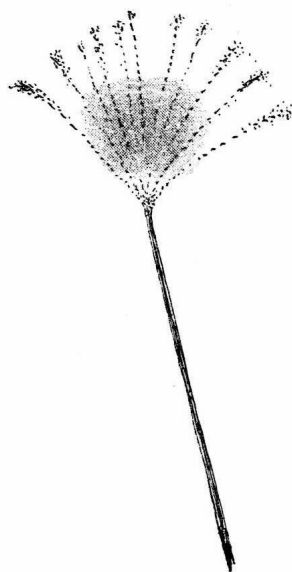
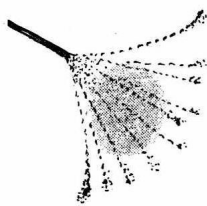
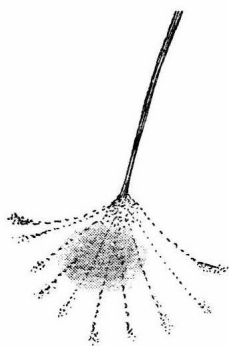
岡部事件と私 二九

町内会をかえる 二八

たんぽぽの家 一六

あとがき 三三

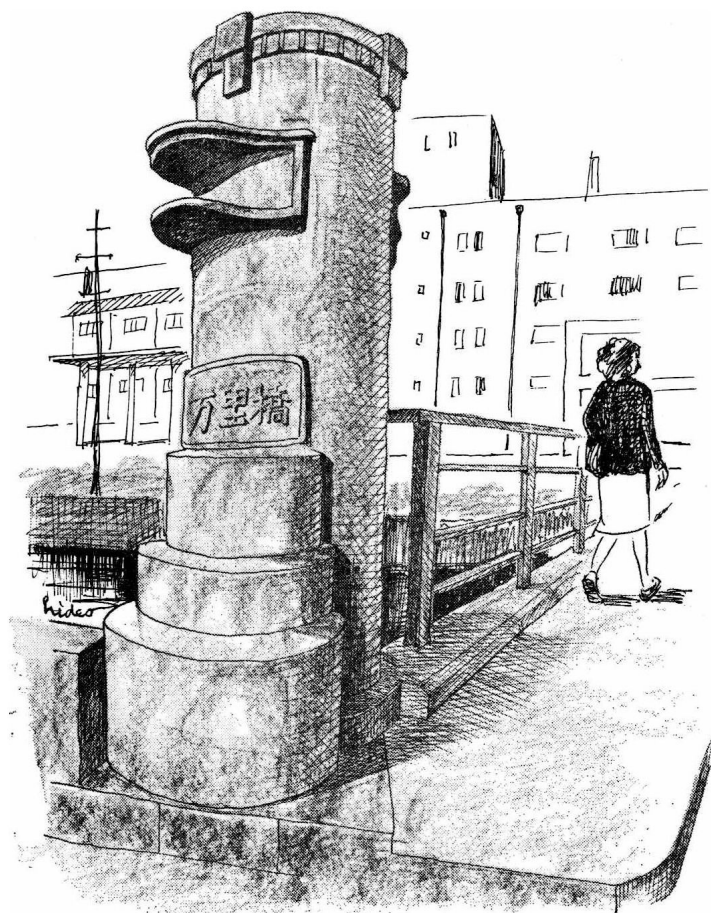
わたしの横浜



ふるさと・西区高島町

横浜駅東口を出て右へ行くと、すぐの建物が横浜中央郵便局で、向い側には崎陽軒のビルがある。その間の道路を歩いて数分で、帷子川^{かたはら}に出る。帷子川にかかる橋が万里橋で、私の家はその橋のたもととの二軒目であった。一軒目、川沿いの角地のトシコちゃんち、は、釣舟屋の片隅で煙草も売っていた。その隣の私のうちは、私が小学校へ上る前からしもたやであった。しかし、以前に商売をしていた名残りに、表通りに面した広い玄関には素通しのガラス戸が入っていた。

ごく幼い頃の記憶の中に、もしかしたらお菓子屋だったのではないだろうか、と思われる情景がわずかに残っている。木の台があつて、その上にガラスのふたのついた平たい箱がいくつか並んでいた。箱の中には飴とかせんべいとかが入っていたような気がするのである。私が三歳のときに一歳で死んだ弟の小さなお棺が焼場へ運ばれて行った日、誰かが菓子箱の中から飴を出して握らせてくれたよう



なおぼろげな記憶があるのだ。

先年他界した祖母からは、焼芋屋をやっていた話、かき氷屋をやっていた話を聞いた。多分、夏期にかき氷、冬期に焼芋を商っていたのであろう。祖父が早死したあと、働き者の祖母が一手にとりしきって商売していたと思われる。

しかし、私の記憶がもつとたしかなものになったとき、父は勤め人になっており、私の家はもう商売をしてはいなかった。何もない広い玄関にゴザを敷いて、近所の子どもたちとお人形遊びをした。釣舟屋のトシコちゃん、食堂のトミエちゃん、床屋のタミエちゃん、瀬戸物屋のトシノちゃん、裏手に住んでいたので通称ウラのミツコちゃんたちは、みな私の幼友達である。洋服屋のセツコちゃんは、少し年上で、私たちとは時々しか遊ばなかった。

年上の友だちといえば、私にはもう一人、忘れられない人がいた。私が小学校へ上った頃、私の家の左隣はお菓子屋になっていた。かつて私の家で行っていたような駄菓子屋風の店ではなくて、ワインドに栗まんじゅうや最中の化粧箱とかビスケットの詰め合わせのきれいな缶などを飾った本格的な菓子店である。その店番をしていたのがナツちゃんだった。私の眼からは随分と大人の女の人のように見えたが、実際には小学校の高等科を卒業して少したったくらい、一六、七歳だったのではないだろうか。平沼町の市場のそばの菓子屋の長女で、新しく出した横浜駅のそばの支店に毎日通って来っていたのである。

ナツちゃんは本が好きで、店番をしながらいつもキングとか婦人倶楽部といった大人の雑誌を読んでいたが、あるとき私に『少公女』という子ども向きの本を読んでもらった。少し大袈裟に言えば、これは私にとっては運命的な出来ごとであった。私はごく幼い頃から無意識にひとりごとをいいながらひとり遊びをしていたのだったが、『少公女』のヒロイン・セーラがお話を考えるのと、私のひとりごとが同じであることを、自覚したのであった。『少公女』は私の愛読書（というのもへんだが）となり、『少公女』読んで頂戴、と、ナツちゃんにねだっては何度も繰り返して読んでもらった。いくら読んでももういいということがないので、しまいにナツちゃんは、自分で読みなさいといって本を貸してくれた。私が夢中になって、読みに読んだことはいうまでもない。かなり厚い本を全部暗記してしまったくらいに読みふけた。それから自分でお話をつくり、それをノートに書きとめるようになった。この頃から、随分たくさんのお話を書いたと思うが、戦災で全部焼失してしまったのは、今になると惜しまれる。

ナツちゃんは面白い人で、お姫さまごっこというのをしてくれた。私たちに大人の着物をおひきずりに着せて、帯をだらりに結び、顔には濃いお化粧をしてくれた。それ以上別に何をするというわけでもなくて、ただ、そういう恰好をするだけなのであったが、この遊びはなぜか秘密めいて、胸がドキドキした。一度、遊んでいる最中に母が迎えにきたことがあった。大急ぎで着物を脱いで家に帰ると、いったい何をしていたのか、と母にひどく叱られた。自分ではすっかり忘れていたが、顔にお白粉や

